医療物資 輸送準備進める

山科 音羽病院、キーウの病院と交流

ウクライナ 侵攻

京都・滋賀

「できる限りの支援を」

ウクライナ首都キーウ（キエフ）市郊外の公立病院に、医療物資を寄贈する準備を、洛和会音羽病院（京都市山科区）が進めている。姉妹病院として交流してきた経緯があり、不足物資のリストが届いた。キーウへの訪問経験のある医師らは「有事に医療職が使命感を持つのは世界共通。少しでも支えたい」と連帯の意を強くしている。

支援を検討しているのは、キーウ市郊外の住宅街に位置する「クリニカ第10病院」。音羽病院は京都市とキーウ市が姉妹都市となった縁で、1999年から表敬訪問や医療機器寄贈などの交流を続けてきた。

ロシアによる軍事侵攻が始まった2月下旬、音羽病院職員の和久井達也さん（53）らが「何か支援できないか」とクリニカ病院にメールで連絡。3月末、調達が難しい医療物資のリストが現地の病院長から送られてきた。負傷した兵士や民間人が日々搬送され、手当てに追われる状況も記されていた。

リストには手術用のメスや針、糸、滅菌タオル、医療用ガウンなど約150品目が挙げられていた。寄贈する物資は総額1千万円規模になる見通しで、同病院の倉庫で確保を急いでいる。

ただ、輸送ルートの確保が大きな課題だ。ポーランドまでは送れるが、同国からキーウまで届ける手段が見つからず、模索を続けている。和久井さんは「送金はできるが現場はとにかく物資が必要なはず。もし有効な手段があれば教えてもらいたい」と話す。

17年にクリニカ病院を訪問した産婦人科医の矢野阿壽加院長補佐（38）は、「キーウの美しい街並みや、多くの女性医師が活躍していたことが印象的だった」と回想。「医者として一人の命を救うことの難しさを日々感じている。多くの人の命が奪われて心が痛く、できる限りの支援をしたい」と力を込める。（森静香）

輸送の準備を進めている手術用の器具や医療用のガウン。キーウ訪問経験のある矢野医師（左）や和久井さん（右）は心を痛めている＝京都市山科区

京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.
©京都新聞社 無断複製・転載を禁じます